資料１

資源化業者アンケート調査結果の概要

本資料の位置付け：「資源化業者アンケート調査結果」は、「処理方式の評価（残さの資源化の恒久性）」の根拠データとなる。

アンケート調査結果を踏まえた灰の恒久的な処理に関する課題

アンケート調査の結果、燃やせるごみの処理方式にかかわらず、灰の資源化には相応のコストがかかるとともに、恒久性について懸念がある。

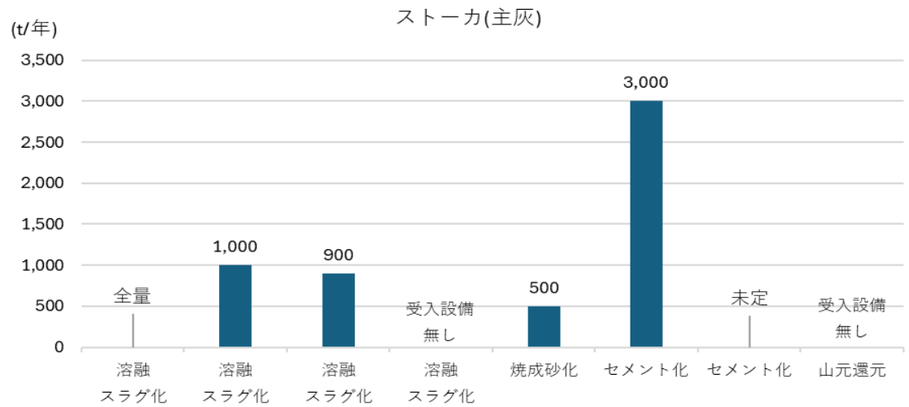
処理方式		灰の種類	資源化の恒久性	灰1トン当たりの資源化コスト例 （溶融スラグ：運搬費＋資源化処理費）	アンケート調査結果を踏まえた 灰の恒久的な処理に関する課題
焼却	ストーカ式	焼却灰	資源化の選択肢としては3方法（溶融スラグ3社、セメント原料化1社、焼成砂化1社）あるが、溶融スラグ1社を除き、受入可能量に上限があり、今後の市況によっては資源化の選択肢が減ることも考えられ、恒久性に乏しい。	約60,000円（税抜）/トン	いずれの灰においても、資源化を行うためには運搬及び資源化処理に相応のコストを要し、かつ、恒久性に乏しい。
		飛灰	資源化の選択肢が1方法（溶融スラグ）のみであり、受入可能な業者も2社と少なく、恒久性に乏しい。	約70,000円（税抜）/トン	
ガス化 溶融	シャフト式	溶融飛灰	資源化の選択肢が1方法（溶融スラグ）のみであり、受入可能な業者も2社と少なく、恒久性に乏しい。	約80,000円（税抜）/トン	
	流動床式				

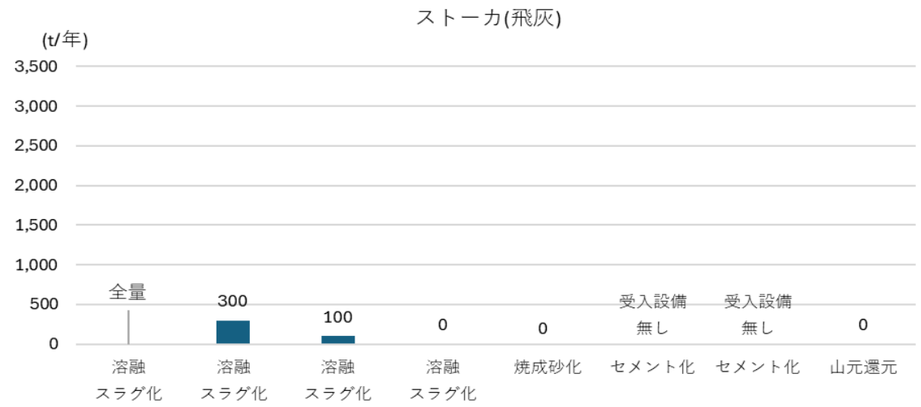
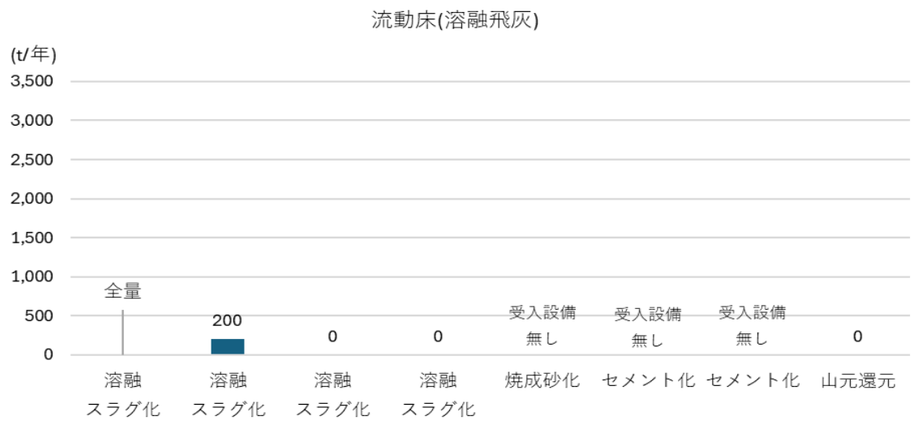
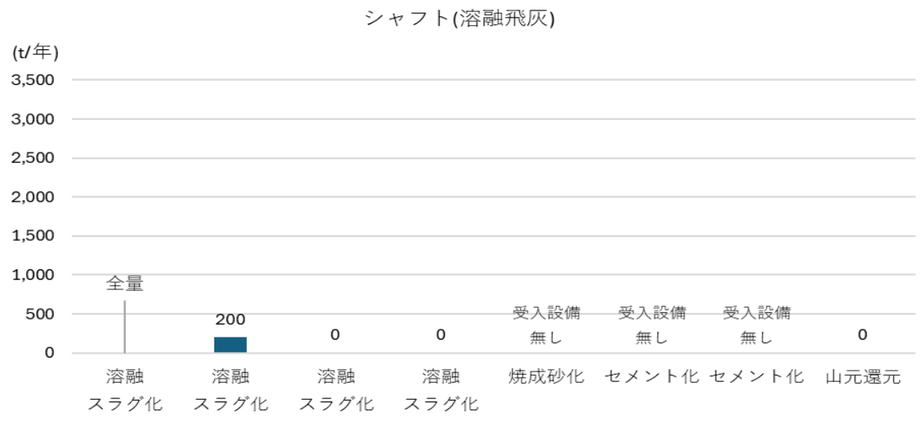
※「焼却＋メタン発酵」から発生する灰は、ストーカ式と同じ。

＜参考＞灰の資源化業者アンケート調査結果の概要

資源化方法	回答依頼	回答受領
溶融スラグ	4 社	4 社
セメント原料化	7 社	2 社
焼成砂化	2 社	1 社
山元還元	3 社	1 社

令和 16 年度以降の受入可能見込み量　ストーカ（主灰・飛灰）





令和 16 年度以降の受入可能見込み量　ガス化溶融（流動床（溶融飛灰）、シャフト（溶融飛灰））